資料渉猟余話

その67

甲子紀念碑の周辺

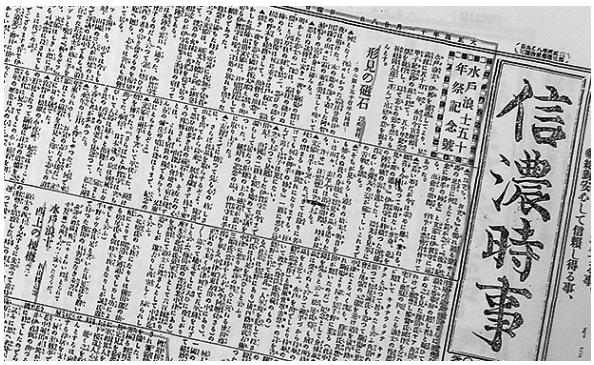
嶋　不濁

水戸浪士が飯田の町を通過したのは、元治元年（1864）11月24日である。その騒擾の様は島崎藤村の『夜明け前』にも触れられているのでご存知のむきも多いだろう。昭和4年から10年にかけて発表された『夜明け前』は、木曾や伊那の平田国学没後門人たちの、その後の物語としても読める部分も多々あり興味深い。平田国学の没後門人の多かった飯田・下伊那では、維新後の慶応3年（1868）3月に四大人（荷田春満・賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤）を祀る本学神社が建立されるなどその顕彰もされたが、年月の経過とともに次第に忘れられていく。

その後、そうした危機感からか、飯田では、明治34年（1901）2月に浪士たちが昼食をとった今宮原頭に「甲子紀念碑」が建てられ、祈念祭が催されている。

また大正3年（1914）は水戸浪士通過から50年の節目の年だったが、「諒闇中であり、かつまた人々の記憶が遠のいたせいか「南信」新聞に懐古記事あるきりで、取り立てて祭事が行われることはなかったようだ。

ところがその翌年大正4年8月に創刊された日刊紙「信濃時事」は社長が瀧澤清顕、有力な後援者に北原阿智之助、北原源三郎ら、記者にも中原謹司など平田国学系の人々が多かったせいだろうか、連載読み物に「幕末裏面史　座光寺源三郎」を連載し、10月に入ってからは1年遅れの水戸浪士通過に関する連載を、さながら忘れられようとしている事跡に連なる飯田下伊那の名家を取り込むための戦略のように何本も続けざまに掲載している。11月21日付「信濃時事」には28日からの本日を前に「水戸浪士五十年祭」という連載が新たに始まった。「星霜の推移に随って遺物も散佚し、当時の年代記的な物語りが漸次消え失せるのを憂て当時浪士通過の際盡力した人々の遺族北原阿智之助、北原源三郎（民右衛門家）、今村録七郎（眞幸家）、野原半三郎（問屋）木下倭志雄、上柳緑、奥村収蔵、窪田治郎八、樋口與平、山田與平の諸氏が主唱になって五十年記念祭を、この廿八日の朝から今宮の風越館で催す事と決定した（後略）」とある。この連載は開催当日まで連日、その後は「水戸浪士と飯田藩」のコラムが取材記事をもとに水戸浪士通過の経緯や逸話を2カ月にわたって毎日のように連載している。新聞連載の署名には岩崎雨村の名前も確認出来る。



２カ月にわたる特集が組まれた「信濃時事」

甲子紀念碑建立の記念写真（明治34年・中島準一郎氏蔵）